

# 「これからの学術情報システム のメタデータ収集・作成方針に ついて(案)」の検討と策定

これからの学術情報システム構築検討委員会 システムワークフロー検討作業部会主査 飯野勝則(佛教大学)

## はじめに

#### アジェンダ

- ●2022年2月,「システムワークフロー検討作業部会」では, 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針に ついて(2021)【案】」という文書をドラフト版としてウェブ サイトに公開した
- ●その結果,約2か月間にわたり,その内容について,さまざまな得難く,かつ貴重なご意見を頂戴することができた
- ●本日は「収集・作成方針(案)」のドラフト版公開を踏まえ、 その意図と内容、検討状況、今後の予定等について報告したい

#### 「収集・作成方針(案)」【ドラフト版】

これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針について(2021)【案】

これからの学術情報システム構築検討委員会 システムワークフロー検討作業部会



https://contents.nii.ac.jp/korekara/about/sw\_wg/documents, (accessed 2022-05-19)

#### 【ドラフト版】の目次構成

- 1. はじめに
- (2019)」とメタデータ 策定の背景
- 3. 「物理的な資料」のメタデータ
- 4. 「電子的な資料」のメタデータ
- 5. 「デジタルな資料」のメタデータ\_
- 在り方の具 現化に向け た提言
- 6. 共同利用システムへの「見解と方針」反映の実際
- 7. 参考文献

現状分析

### 「収集・作成方針(案)」策定の背景

「これからの学術情報システムの在り方について(2019)」とメタデータ

「これからの学術情報システムの在り方について (2019) 」

- ●2015年(平成27年)に公開された「これからの学術情報システムの在り方について」を改訂する形で,2019年(平成29年)に公開された文書
- ●「(2019年)現在の目録所在情報サービス機能を維持しつつ,電子情報資源への対応等,より豊かな機能を各機関が選択的に導入できるシステムの実現に向け,2022年を目処とした進むべき方向性,次に取り組むべき課題,及び検討体制を提示する」ことを目的に作成された

#### 「在り方(2019)」が示す「進むべき方向性」(1)

#### 3. 進むべき方向性

これまでの検討を踏まえ、これからの学術情報システムが実現すべき機能及び検討 課題について、以下の5点にまとめた。

- (1) 統合的発見環境を可能にする新たな図書館システム・ネットワークの構築 統合的発見環境の実現に向け、従来の NACSIS-CAT/ILL の枠組みを維持しなが ら、より豊かな機能を各機関が選択的に導入できる環境を整備する。そのために、 国立情報学研究所等が集中的に提供する中央システムと、各機関が中央システム と連携して運用する図書館システムを有機的に連携させた新たな図書館システム・ネットワークがサポートする機能を定め、それぞれが担うべき役割を整理する。
- (2) 持続可能な運用体制の構築 新たな図書館システム・ネットワークを運用するための持続可能な枠組み及び コスト負担等について検討を行う。
- (3) システムの共同調達・運用への挑戦

これまで各機関や国立情報学研究所がそれぞれ単独で調達・運用してきたシステムの共同調達・運用を選択肢とした課題解決の実現可能性を見極めるため、コスト,各機関での分担、運用主体等について、踏み込んだ検討を行う。

#### 「在り方(2019)」が示す「進むべき方向性」(2)

(4) メタデータの高度化

他機関 (NDL, 出版社等) と連携し, RDA (Resource Description and Access) 及び日本目録規則 2018 年版への対応のほか, BIBFRAME 等の新たな国際標準への対応について検討を行う。

(5) 学術情報資源の確保

印刷体とともに、幅広く電子情報資源(大学等のデジタルアーカイブや過去資料の電子化を含む)を確保するとともに、統合的発見環境を通じたアクセス及び資源 共有を推進する方策を検討する。

- ●これらを具現化させるためには、図書館をめぐるさまざまなシステムやサービスを設計する必要があることに加え、その中で提供されるメタデータがシステムやサービス、利用者にとって適切かつ望ましいものであることが求められる
- ●とくに(4)(5)では、メタデータが主役ともいうべき位置づけ

#### システムワークフロー検討作業部会として

- ●システムワークフロー検討作業部会では,「在り方(2019)」 の具現化を視野に,これまで必要とされるシステムやサービス の設計や検証を行ってきた
- ●そうした中で、「在り方(2019)」を具現化するためには、システム上で提供されるメタデータについて、一定の要件を満たすことが必要であるとの認識が強まった
  - ▶このようなメタデータの姿を提示することは、「教育・研究DX」に寄与するであろう、学術情報資源の統合的発見環境の実現においても有益であると認識

### 「収集・作成方針(案)」が示すもの

「在り方(2019)」の具現化に向けて

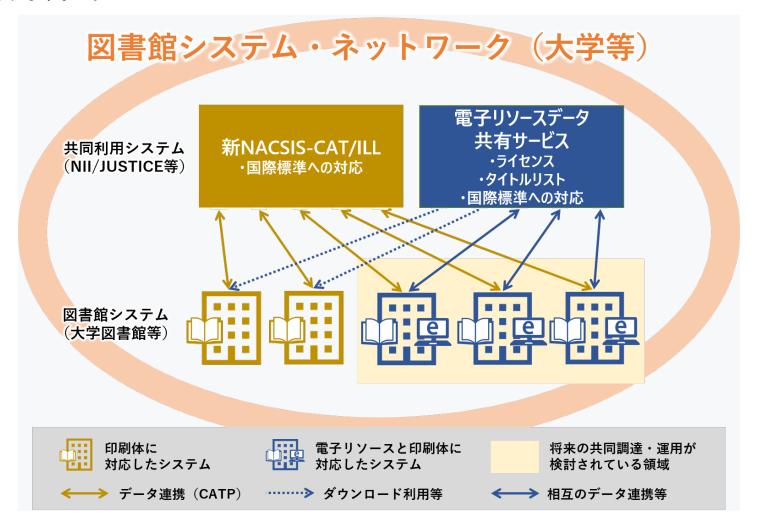
#### 「物理的(Physical)な資料」のメタデータ

- ●2023年度に,「日本目録規則2018年版」(NCR2018)の適用を開始することにより,相互運用性を高め,より豊かで,図書館職員のみならず,利用者(エンドユーザー)にわかりやすい目録を構築することを目標とし,提言を行っている
- ●典拠コントロールの拡大やリンクトデータを踏まえた外部典拠 データとの連携などに関しても検討

#### 「電子的(electronic)な資料」のメタデータ(I)

- ●「共同利用システム」を国内で出版させる学術電子ブックのメタデータを集約するプラットフォームとしても機能させることで、電子の「目録」を構築する方向で検討
- ●たとえば、電子ブックのプラットフォームを有する大手書店や、 流通系のメタデータを集約するopenBDから、「目録」用のメタ データを収集することを前提に、望ましいメタデータの在り方 を提言している

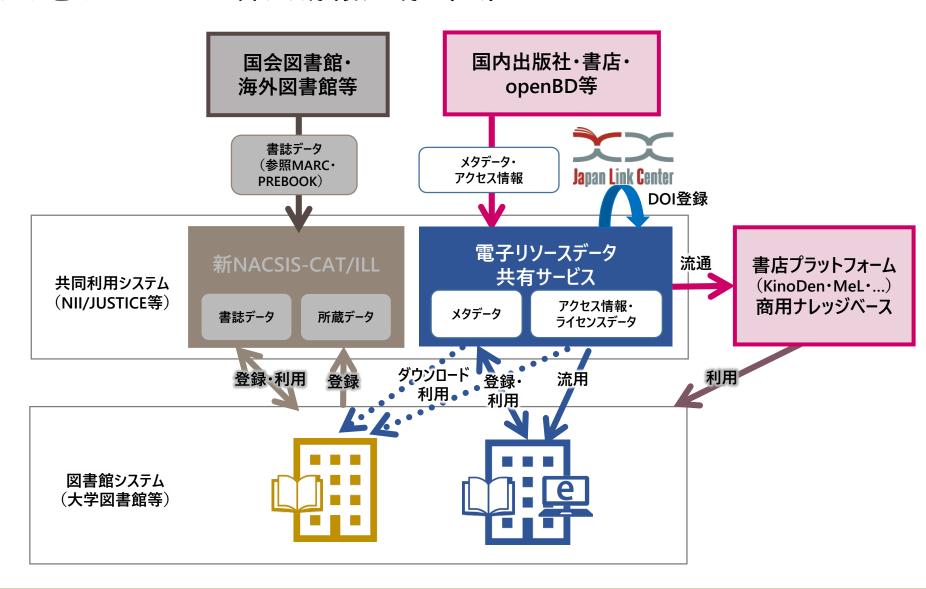
#### 共同利用システム



#### 「電子的(electronic)な資料」のメタデータ(2)

- ●マイクロコンテンツ(電子コンテンツを構成する章や図表など)に識別子(DOI)を付与することで、単一のレコードとして扱えるようにし、可視化できないかを模索
- ●すなわち、「共同利用システム」として提供される「電子リソースデータ共有サービス」において、こういったマイクロコンテンツのレコードを収集し、Japan Link Center (JLC) が識別子 (DOI) を付与できるような仕組みを整えることや、流通の在り方を提言

#### 国内電子ブックの書誌情報共有(図)



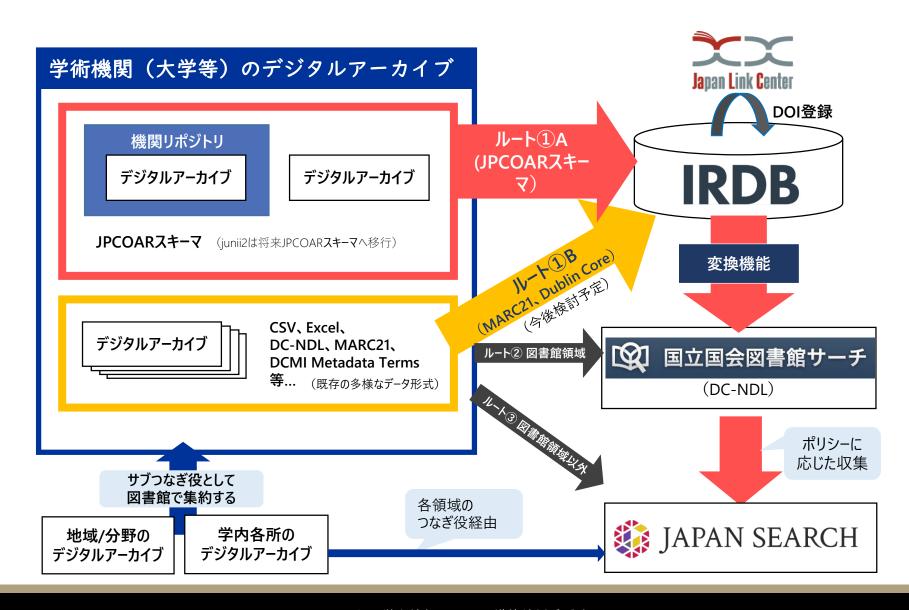
#### 「デジタル(digital)な資料」のメタデータ(I)

- 作業部会として、学術機関(大学等)が構築しているデジタル アーカイブのメタデータをジャパンサーチに連携するための考 え方について整理
- ●さまざまな学術機関が、さまざまなスキーマやフォーマットで デジタルアーカイブのメタデータを作成している一方で、ジャ パンサーチがそれらを捕捉できていないという現状への対応方 法を提言

### 「デジタル(digital)な資料」のメタデータ(2)

- ●共同利用システムを構成するIRDBが、学術機関(大学等)のデジタルアーカイブと、ジャパンサーチを結ぶ、主要な「つなぎ役」となることを前提として、望ましいメタデータの流通経路やデータ交換形式について議論を進めている
  - ▶なおスキーマ等の詳細な内容は、「収集・作成方針(案)」で示すも のではないが、適宜、国立国会図書館とJPCOARとの間で意見交換を 行っている

#### デジタルアーカイブの効率的なメタデータ流通経路(図)



#### 「共同利用システム」への「見解と方針」反映の実際

- ●NACSIS-CAT/ILLのメタデータが、国内外でより利活用されやすい環境を構築する必要性を認識
  - ▶CiNii Books APIによるRDFおよびJSON-LD 形式でのリンクトデータの 提供を実現しているが、将来的にはBIBFRAMEなどでの対応も検討
- 契約状況に関わるライセンスのメタデータを電子ブックや電子 ジャーナルのメタデータと組み合わせて利用できるような環境 を構築することの効果などを検討

#### 今後の予定

- ●現在は「ドラフト版」について,お寄せいただいたご意見を踏まえ、内容を修正ならびに再構成を行っている段階
- ●「これからの学術情報システム構築委員会」での審議を本年度中に行い、その後正式版として公開する予定
  - ▶「在り方(2019)」と同様に、たとえば「メタデータ収集・作成方針 (2022)」という形で、年次を示すことで、数年ごとに内容を更新で きるような形態でリリースすることを考えている

ご清聴ありがとうございました